

「三位一体の神によって届けられる愛」

(ヨハネによる福音書 3:1-16)

「神はご自分の独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

これ以上に語るべきことがあるでしょうか。神は、この世の誰一人、愛に飢え、不正のなかで死んでいくことを望んでおられません。

創造のはじめ、神と人は共に顔と顔を合わせて暮らしていました。しかし人間は、食べてはいけないと言われた木の実を食べてしまい、神から離れてしまいます。そもそも木の実を食べてしまうところに、神に無自覚のうちに背いてしまう人間の姿を見ることができると言えるかもしれません。それでも、神は人を愛し、導きます。律法によって、預言者を通して、人にその愛を伝え、どんなに人が酷い裏切りにより神から離れても、赦し、ご自分のところに帰るように導かれます。人は赦されるたびに、これからは神に従いますと誓うのですが…結局は預言者を殺し、自分たちの都合のいいように律法を骨抜きにし、神から離れてしまうのです。そうしているうちに、人は神がどこにいるのか分からなくなってしまいます。まして、神が自分を愛しているなど、到底分からなくなってしまいます。それでも人はわがままですから、天国に行きたいと願い、平和を求め、愛されたい、神に近づきたいと望むのです。けれども、どうしたらいいのか分からない。そこで、律法を文字通り守ろうとします。けれども、神の愛を知らずして、律法の「心」はわかりません。律法に込められた神の愛を知らないのに、律法を正しく守ることなどできないのです。神の心が抜けた、愛無き律法は人を裁く道具になります。結果、聖書に記されている通り、人は律法の名のもとに裁き合うようになり、不正がはびこります。弱くされた者は救われず、正しい人でさえも律法の文字を根拠に排除される世界になってしまいます。しかし、人をどこまでも愛される神は、そんな人間をも放っておきません。いよいよ、愛する独り子をこの世に遣わしてくださるので

す。

この御子を通して人は神の心、神の愛を知ることになります。その愛が示された場所こそ、十字架の上です。律法の一言一句を暗記し、知識として持っていたても、神のことは知ることはできません。人のためにご自分の命をささげる主イエスの姿を通してこそ、人間の罪が必ず赦されること、そして神がこれほどまでに人を愛してくださっていることを知るのです。そのことが、聖書では今日の福音書にも登場するニコデモを通して伝えられます。ニコデモはファリサイ派に属し、最高法院の議員であり、律法の教師でした。しかも、彼は聖書に出てくるファリサイ派のイメージとは随分異なり、謙虚な人で、主イエスへの興味、信頼を強く抱いていました。主イエスに聴けば真理に至ることができる、本当に大切なことが分かる、そう感じていたのです。しかし、彼は堂々と主イエスのもとを尋ねることはできませんでした。夜になってから主イエスのところへ来るのです。ファリサイ派の仲間たちに見つかって何か言われることを恐れたということもあるでしょう。また律法の教師なのに主イエスに教えを求めたことが噂になること忌避したのかもしれませんが。いずれにせよ、ニコデモは主イエスに惹かれる感性を持ちながらも、この世的な観念、価値観にとらわれている人であったことが分かります。そして、そのニコデモの人間性は、

主イエスとの復活についてのやり取りでより鮮明に暴かれます。主イエスが導こうとするところ、本質に至るまでに、ニコデモは幾重にも重なる常識や知識といったものにぶつかってしまい、辿り着くことができないのです。そして残念ながら、主イエスが語る復活のこと、そしてそれこそ律法にも込められた神の「心」に至ることができないのです。しかし、この時には主イエスとのやり取りで信仰告白に至らなかったニコデモでしたが、主イエスが十字架上で死んだ後、アリマタヤのヨセフと共に主イエスの遺体を引き取り、埋葬をするほどに変えられます。さらに伝承では彼はクリスチャンになり、殉教したとまで言われています。人間の理性や知識はとても大切なものです。しかし時にそれが真理への道を閉ざすものとなってしまうことがあります。やはり、信仰には十字架によって示された神の愛に触れることが本当に必要なのだと思います。

では、わたしたちはどうすれば十字架の上で示された神の愛に触れ、常識や知識を超えて、信仰に至ることができるのでしょうか。ちっとも説明にならないような言い回しをしてしまいますが、それこそ、主イエスが言われるように、水と霊によって新しい命をいただかなければならないのです。それは一体どういうことかと言うと、神の愛に至る道を閉ざすあらゆるものを、神によって洗っていただくということです。水は霊の象徴です。霊の水で洗われるとき、わたしたちは霊の命をいただき、主イエスの十字架上の姿に神の愛を見る信仰が与えられます。そのためにこそ、神は聖霊を降し、あの弟子たちを変えてしまうほどの力をこの世界に送ったのです。その聖霊はわたしたちの今生きるこの現実にも吹き荒れているものであり、同時にわたしたち一人ひとりに今この時にも伴っているものです。つまりここに吹き荒れている、わたしたちに伴っている聖霊、神の力を感じるところに、常識も知識も超えた信仰への道、神の愛に触れた命への道が開かれます。わたしたちは風のように今もここに吹いている霊の語りかけに耳を澄まし、霊の導きに委ねなければなりません。でなければ、かつてのニコデモと同じように、いくら愛を求めても、真理を求めても、それに至ることはできないのです。しかし、霊によって洗われ、自分の思いに従って肩で風を切って歩く生き方から、霊の風に身を委ねる生き方へと変えられるなら、神にある真理、神の思い、神の愛を知る事ができるのです。

神はこうして、旧約の時代から注ぎ続けてくださった愛を、主イエスの十字架により、そして聖霊によってわたしたちにご自身の愛を届けてくださっているのです。今日の三位一体主日。まさに三位一体の神が、人知を超えた、神にしかできない方法で、わたしたちに愛を届けてくださることをあらためて感じて過ごしましょう。